

■ 編集後記

雪の降るのも間近です。教室員の論文を岩手医大歯学会誌に急ぎ投稿し、査読者の鋭いあるいは当然の指摘に身の縮む思いをしました。論文は書き上げた後にか月も寝かして、他人の論文として読むと、誤りが少なくなるのでしょうか。反省。

(久保田 稔)

本委員会では、会員にとって“わかりやすい”、“納得の行く”編集を心がけてきました。金子委員長を中心とする編集委員会の姿勢が理解され、多くの会員が参加する雑誌として歩んでいることを嬉しく思います。

(石橋 寛二)

金子委員長のきめ細かな編集方針のもと、第20巻から第22巻までの3年間を分担した。本誌が歯学部における唯一の雑誌であることから、その内容がより良質のものとなるよう、できるだけ努めてきたつもりである。常に感じたことは、多くの異なった専門領域の論文を査読するのに要する時間と労力は役目柄とはいえ、かなりのエネルギーを消耗することであった。論文の構成は題名に即して論旨が述べられ、その内容は第三者が通読しても理解できるよう平易な表現によって作成されるべきである。しかし、言うは易く、実際にはかなりの努力と経験を要することを実感する。今後とも、本誌が時代に即応して改良され、歯学雑誌としてより高く評価されることを期待する。

(工藤 啓吾)

岩医大歯誌は種々な分野の論文が掲載されますので、専門以外の新しい知識に触れることもあり、この意味ではやり甲斐がありました。

本誌22巻も本号にて終わり、次号は新しい委員により編集されます。これまで編集委員をしたこと

により得られた知識を今後の教育に生かせたらと思っています。

(佐藤 方信)

紅葉の美しかった時期が過ぎ、岩手山も白い雪帽子が似合うような季節になりました。

この3号に沢山の論文が掲載でき、金子克編集委員長を始め編集委員一同大変喜んでおります。

投稿者、査読者、そして印刷会社間の橋渡しに素晴らしい手腕を示された金子先生にとって、本号は最後の編集になりました。いつも時間との闘いではなかったでしょうか。先生のこれまでのご苦労に感謝いたします。

(佐藤 詔子)

編集委員の金子先生長い間ありがとうございました。投稿論文の中には、読み易い論文、逆に読みにくい論文、結果が極端に短く考察が必要以上に長い論文など種々あります。小生の勉強不足により各専門分野の特徴を判読することの難しさを痛感しました。多くの専門分野の論文からなる歯学会誌ですから、専門外の人でも理解できる文体にして下さるようお願いします。

(戸塚 盛雄)

暖冬であるといわれましたが、12月に入り急に雪が降り寒くなりました。

本誌も22巻の最終号を迎えました。幸いにも毎号、沢山の投稿があり、また、発行期日も守ることができました。皆様のご協力のたまものと感謝申し上げます。

世はバブル崩壊後の付けが、にわかには噴出した感があり、騒がしくなって参りました。来年こそは飛躍の年になることを願わずにはおれません。佳い年をお迎えください。

(金子 克)